



続・増穂薪窯通信

てんやわんや

増穂登り窯から見た初冠雪の富士山 (2013. 10. 19)

文・写真 増穂登り窯太田治孝

第5回

塩釉焼成報告

やきものの原点は薪窯焼成による焼締です。その焼成中に塩を窯内に投入する方法を塩釉焼成といえます。

10年ほど前、オーストラリアの東海岸、ゴールドコーストに住む友人の紹介で、塩釉焼成で制作している地元の女流陶芸家の工房にお邪魔しました。

以前、増穂でも八方窯で焼成中に一部の作品に対して塩を焚き口から投入した経験ありましたが、焼成中の窯全体を塩釉でというのが未経験でした。

オーストラリアの陶芸家は、燃料にユーカリ材を使用して薪窯焼成していました。ちなみに、ユーカリの木は数百種類あり、コアラ



磁土の塩釉作品。見込みはビードロ状に

が食用とするのは、その中の2、3種類だそうです。ユーカリ材は油分が多いので、切り倒してから数年経過しても、充分焼成に利用可能だそうです。

素焼きした作品に透明釉、鉄釉、コバルト釉などを施釉して薪窯に窯詰めします。このときは、ロケット窯という名称の窯を使用していました。

正面の焚き口から煙突まで4m、長方形型で横から見るとL字型となります。約50cm角の棚板が天井部となります。窯詰めは、この天井部を外して上外部から作品を詰めます。食器類ならば、かなりの点数が入ります。

ガスバーナーで10〜15時間「あぶり」で1000度以上として、続いてユーカリ材で6時間以上、その後塩を投入して終了。2日後に窯出しです。オーストラリアカオリンで制作した作品は、ビードロ口色などガラス状の表面で美しく発色します。

増穂登り窯では、この焼成法を研究させていただき、試験的に焼成を行いました。薪焼成にこだわっているのが、最初から最後まで薪を使用しました。

登り窯の最終室を塩釉専用の部屋にする方法もあるのですが、棚

天然無着色の塩釉作品。正面に流れるのは松灰



高台裏まで流れた塩釉。天然灰が被り、美しいビードロに発色した

焼成は適しません。

今回の焼成は、火入れから15時間200度、35時間で1200度、1220〜1230度をキープして、塩(食塩)を20kg投入、火入れから約40時間後に終了しました。

陶土の種類や顔料の呉須(コバルト)の種類、濃さ(前号139号50ページ「呉須ってなんですか?」参照)などは混ぜ方によって発色が異なります。火入れから火止めまでに使用した薪は、約800kgでした。

今年、伊勢神宮は20年に一度の式年遷宮、出雲大社は60年ぶりの



増穂登り窯にある8基のうちの1基「単窯(倒炎式)」。赤松で焼成中

板4枚分のスペースがある単窯(約1.5m)を使うことにしました。その後、この窯は塩釉焼成専門の窯となりましたが、約20回の焼成で床が壊れてしまい、大修理となりました。

今回の報告は、その修理後、2回目の焼成となります。窯詰めは、床面積が40cm×35cmの棚板2枚と45cm×40cm2枚、全体で32枚の棚板を使用しました。

作品の窯詰めは、炎が全体に充分流れる道筋を計算して配置し、上部に流れた炎が下段まで全体にかかるようにしました。上段には大作を、中段には皿などの平物下段には湯呑、茶碗などです。このサイズの薪窯では、特大作品の



ややルリ釉に近い色に発色。呉須(コバルト)の種類によって青色が微妙に異なる



呉須と鉄を使用した塩釉茶碗

遷宮が行われました。大自然の中で芸術、文化、技術が正確に継承されています。やきものも原点に戻り、継承したいものです。

1000円で薪窯焼成参加者募集!

増穂登り窯で、憧れの薪窯焼成を体験してみませんか? 詳細は106/107ページ参照。

開催日 2014年4月下旬

参加費 千円/1名

※窯出し日は、増穂登り窯お手製のマスコットや地元富士川町の日本酒で贈答会を予定しています。

2

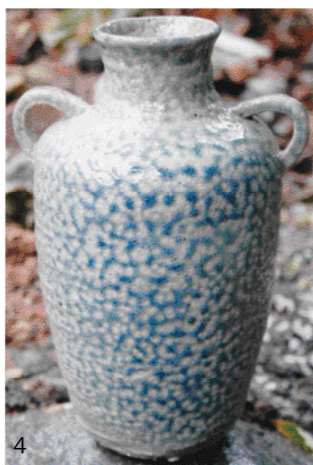
3

1. 塩釉焼成した単窯内。平面棚板3枚分の全体

2. 石入りの陶土を使用。下半分は呉須液を筆で塗って着色したもの

3. 写真2より、やや濃いめの呉須を使用。

4. 写真2より、やや薄めの呉須を使用。同じ呉須でも濃度差で発色の違いはさまざまになる



4